公開講演会

クルアーン解釈からみるジハード論

日　　時:2005年10月22日(土)　13:30−15:30
会　　場:同志社大学　今出川キャンパス　神学館礼拝堂
講　　師:塩尻 和子(筑波大学大学院人文社会科学研究科教授)
コメント:四戸 潤弥(同志社大学大学院神学研究科教授)
司　　会:小原 克博(同志社大学大学院神学研究科教授)
主　　催:一神教学際研究センター

講演要旨

今日の国際関係上の混乱の要因のひとつには、イスラームに関する誤解と偏見があるということを否定することは難しい。いわゆる先進国は、イスラームという宗教とその信者ムスリムについて、客観的で真摯な研究や理解をないがしろにしたままで、ムスリムの住む土地に攻撃や抑圧を加え続けている。現実には、暴力やテロの被害者は圧倒的にムスリムの側におおく出ているにもかかわらず、ほとんどの場合、ムスリムは暴力やテロや戦争の当事者の側にあるとみなされている。現在の紛争や騒乱が、共産主義にかわる二項対立の構造にかかわるものとして「イスラーム蔑視」にもとづいて意図的に作り出された「代理戦争」であるということは、いまや周知の事実となっている。しかも一部のイスラーム教徒によって、先日のインドネシア、バリ島のテロ事件のようなテロや暴力事件が頻発しており、イスラーム蔑視をますます促進する要因となっていることも事実である。
このような現実を踏まえて、さまざまな混乱や紛争の原因を短絡的にイスラームの教えに求める傾向は減ることはない。最近、わが国でも一部の学者の間で「クルアーン教えには本来的に暴力を容認するものがある。だから一般のムスリムもテロを黙認するのだ」という声高な主張がみられるようになってきた。しかも、その主張は、きわめて分かりやすいとして、わが国の政治や外交を司る行政府の中枢にまで大きな影響を及ぼしつつある。

今回の講演はこのような主張に対するひとつの反論として、クルアーンに記述されている戦闘的章句を中心に、「ジハード」に関する聖典解釈という見地から再検討するとともに、新旧訳聖書の同様の記述とも比較検討する。イスラームの理想とする教義を客観的に学ぶことによって、大多数のイスラーム教徒が求める「平和」と「対話」を理解し、改めてテロや暴力の背景を考えることが、重要ではないであろうか。テロや暴力を防ぐためには、強権や武力ではなく対話と共存が必要であると訴えたい。

(塩尻和子)

クルアーン解釈からみるジハード論

筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
塩尻和子

(1)偏見のないイスラーム理解のために

ただいまご紹介いただきました筑波大学の塩尻でございます。私はイスラーム教徒ではございません。個人的にはプロテスタントの信者でございます。自分の信仰している宗教とは違う立場の宗教を研究することは宗教学者としては面白い作業ですし、比較宗教学の立場から、長年、イスラーム思想を研究し、イスラーム社会とのかかわりを持ってまいりました。客観的な研究の立場から、本日はイスラームについて「クルアーン解釈からみるジハード論」としてお話をさせていただきます。護教的な立場でお話をするわけでもありません。イスラームに対して批判的な立場から話をするというわけでもありません。ただ世間一般に流れているさまざまなイスラーム観、イスラーム批判に比べますと、私が話しますことはイスラーム寄りの発言をしていると思われるかもしれません。私たちは通常、マスコミ、その他の報道や評論などの影響を受けて、ある意味で歪曲されて、誤解されたイスラームに接しているということでありまして、護教的なイスラーム擁護論を展開しているわけではないということを、最初にお断りしておきたいと思います。

レジュメには今日お話いたします要旨と、クルアーンの聖句と聖書の聖句を書いておきました。一般に宗教と申しますのは、特に世界宗教と言われる伝統的な大きな宗教は、社会に平和をもたらし、人間の魂を安らかに導くという魂の救済装置としての役割を持っておりますが、同時にその理想を追求するあまり、異教徒や他民族に対する容赦ない攻撃性を含んでいることも事実でございます。このような宗教が含み持つ二面性は世界の歴史を動かす大きな要因となってきたことも否めません。この平和と暴力という相反する性質は、現代世界においても、他宗教への無理解と偏見というマイナス面となって現れています。自文化中心主義、自宗教中心主義は精神世界のみならず、じつは国際政治の上にも大きな影を投げかけております。

こういう観点から考えてみますと、今日の国際関係上の混乱の要因の一つには、イスラームに関する誤解と偏見があるということを否定することは難しいのであります。先進国はイスラームという宗教とその信者・ムスリムについて客観的で真摯な研究や理解をないがしろにしたまま、さまざまな理由や大義名分をつくりだしては、ムスリムの住む土地に攻撃や抑圧を加え続けております。現実には暴力やテロの被害者は圧倒的にムスリムの側に多く出ているにもかかわらず、ほとんどの場合、「ムスリムはジハードという聖戦思想を基盤にしており、暴力やテロや戦争の当事者の側にある」と見なされているわけでございます。イラク戦争後の目を覆いたくなるような惨状も、いまだ解決の方途さえ見つけられないパレスティナ問題も、その背後には強固なイスラーム蔑視が横たわっており、解決の道を遠のかせているように思えます。

現在の紛争や騒乱が、近代化に乗り遅れたイスラーム世界の混乱に乗じて、イスラーム蔑視に基づいて意図的につくりだされたものであり、共産主義に代わる二項対立の構造にかかわるものとして、い

わゆる代理戦争であるということは、今や周知の事実になっているわけでございます。このような混乱や紛争の原因を短絡的にイスラームの教えに求める傾向は減ることはありません。最近、このような傾向や動向に同調して、ある若い日本人のイスラーム学者を中心にして次のような声高な主張が見られるようになってまいりました。

「イスラームの教義には本来的に暴力を容認するものがある。だからムスリムがテロを黙認するのだ。あるいはテロを背後から支援するのだ」という主張でございます。しかもその主張は極めてわかりやすいとして、インターネットの討論の場だけでなく我が国の政治や外交、防衛を司る行政府の中枢まで大きな影響を及ぼしつつあります。

多くの人たちはこんなふうに申します。「何人かの学者が、イスラームは平和的な宗教だと言うが、現実になぜテロや紛争がイスラームの名のもとに行なわれるのか」と。こういう疑問を抱いている人々にとって「イスラームは本来的に暴力を容認する教義を持っているのだ」という主張はきわめてわかりやすいわけです。しかしこの主張は現実的にも教義的にも正しくはありません。しかもこのような主張を繰り返すことは、現在のイラクやパレスティナやアフガニスタンで起きているさまざまな現象を無視していく大きな要因にもなってきます。つまり本来的に教義上、暴力を容認し、そしてそれを信じている人たちが暴力を認めたり支援したりするのであれば、「なぜ外の世界からそういう社会に救いの手や支援の手を差し出さないといけないのか、勝手にやっていればいいじゃないか」というような乱暴な議論に行き着いてしまうわけであります。

(2) クルアーンの教えと暴力

このような議論は、表面上は学問的な装いをまとっていまして、クルアーンの聖句を根拠にして展開されていますので、本日、私たちもクルアーンの思想の中から、特に戦争や戦いに関する箇所を選んでクルアーン解釈という観点から見直してみたいと思います。

じつはクルアーンには「ジハード」という用語で戦闘や戦いを容認している箇所は多くはありません。これほどジハードという言葉が一人歩きしているから、「イスラームの聖書である根本的な教え、神の言葉であるクルアーンの中には、さぞかしたくさんのジハードという言葉が出てくるに違いない」と皆様も想像されるかもしれませんが、決して多くはないのです。むしろジハードとそれに関連する用語は暴力を表現する用語というよりも精神的な意味合いで用いられることが多いのでございます。

しかし一般にジハードという言葉がイスラームにおける暴力的側面を表す用語として象徴的に用いられることを踏まえて、今回の講演の題目を「クルアーン解釈からみるジハード論」といたしました。ジハード論とともに戦闘、暴力の面からも考えてみたいと存じます。したがいまして本日の私の話の意図は「イスラームは暴力を容認するのか否か」を考えることにあります。

ジハードはもともと「ジャハダ」「ジャーハダ」というアラビア語の動詞の派生形から出てきた名詞で、原語としての意味は「努力する」「克己する」「奮闘する」という意味であります。ジハード論に関する用語はクルアーンの中では41の節に現れていますが、41カ所の記述がすべて紛争や戦いに関するものではありません。厳密にはわずか10カ所ほどの節でジハードに戦闘的な意味が与えられているにすぎません。次はクルアーンからの引用です。

> あなたがた信仰する者よ、神(アッラー)を畏れ自分の義務を果たして神に近づくよう念願し、神の道のために奮闘努力しなさい。あなた方は恐らく成功するであろう。(5:35)

ここにある「奮闘努力」がジハードにかかわる用語でございます。動詞の命令形として用いられております。「恐らく成功するであろう」というのは来世で神の御許に近づくことができる、来世で報奨が得られるという、宗教的な成功という意味であって、決して現実的な欲望が満たされるということではございません。

> 本当に信仰して移住した者たち、財産と生命を捧げて、アッラーの道のために奮闘努力した者たち、またかれらに避難所を提供して援助した者たち、これらの者は互いに友である。(8:72)
>
> 預言者よ、不信者と背教者に対し奮闘努力し、彼らに厳しく対処せよ。かれらの住まいは地獄である。何と悪い帰り所であることよ。(9:73)

イスラームの宣教の目的は、すべての人間が唯一の神、アッラーのもとに跪き、信仰をともにすることでありますから、不信者や背教者に対しては奮闘努力して宣教するということになりますが、この中には戦闘的な意味も含まれてくる可能性が出てまいります。

> アッラーの道のために限りを尽くして奮闘努力しなさい。神はあなたがたを選ばれる。この教えは、あなたがたに苦業を押しつけない。これはあなたがたの祖先、イブラーヒームの教義である。(22:78)

イブラーヒームとは旧約聖書の創世記に登場するアブラハムのことでイスラエル族の長老であり、イスラエル族として最初に唯一の神と契約を結んだ偉大なる祖となりますが、イスラームは同じようにアブラハムの伝統からつながる宗教として、みずからを「アブハムの宗教」とも呼んでおります。アブラハムの宗教という言葉を使いますと、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは同一の伝統上につながる宗教であるということになります。

上記で「ジハード」が4回出てきますが、クルアーンの聖句に記されていますジハードの意味は、信者が自らの欲望や心の弱さと闘うことや、神の教えや戒律を重視するための努力、宗教にかかわる知識を求めること、神の教えに従い、人々を唯一の神を崇拝するように導くことなど、さまざまな意味合いで用いられています。そのために「ジハード」には時代や地域との関係などによって、それぞれの時代のイスラーム法学者や為政者によって、じつにさまざまな解釈が行なわれてきたことも事実です。

しかし、今日、世界の多くの人々が「ジハードはイスラーム教徒によるテロや戦争を正当化したり、神聖化したりするものである」と誤解しておりますが、本来の意味は決してそうではないということに注意しなければならないと思います。新聞紙上や書物で言われていますように、ジハードをHolly War、「聖戦」と翻訳することは正しくはありません。ジハードはイスラーム教徒一人ひとりに課せられた義務でありまして、個人的に克己心を持って宗教の道に修行すること、あるいは集団として外から攻めてくる敵を排除するために戦うことをはじめとして、いろいろな意味づけはなされますが、イスラーム教徒、信者の義務として考えられています。

しかしこのジハードの考え方を現在のテロリストたちはまさに聖戦にしてしまい、人々の間に混乱をもたらしていることが大きな問題になってくるわけです。今ここでは、私は現代のイラクにおきますさまざまなジハードの行なわれ方、使われ方、戦闘集団の説明をすることは控えまして、本来、クルアーンが目指したもの、ジハードという言葉が私たちに教えようとしたことは何だったのかということを、もともとイスラームが人々に伝えようとした理念、理想的な面を考えていきたいと存じます。

よく言われることでありますが、預言者ムハンマドの故事にならいまして、ジハードには「大ジハード」と「小ジハード」の区別があります。預言者ムハンマドは西暦610年頃、神の啓示を受けて宗教活動を始めます。西暦622年、生まれ故郷のマッカを追われてマディーナ、当時ヤスリブと言っていた町に移りました。そこが預言者の町となりマディーナという名前で現在に至っているわけですが、そこに移り

ましてはじめて宗教共同体を設立していくことになります。そして宗教活動の中でマッカの人たちと何度かの戦闘が行なわれることになります。

イスラーム初期、とくに移住、ヒジュラの後の十数年間は、預言者ムハンマドと信者たちを取り巻く事情が非常に厳しく、また数多くの戦争が行なわれ、多くの人命が失われた大変困難な時期であったということを考えますと、戦争や殺戮にかかわる章句の意味も理解できると思われます。さまざまな戦争、負け戦もありましたが最終的にムハンマドは生まれ故郷のマッカを無血征服し、マッカにあるカーバ聖殿から偶像崇拝の痕跡をすべて排除して、カーバ聖殿をイスラームの礼拝の中心地として「神の館」という称号を与えたわけです。そのマッカ開城の作業を無事に終えて帰還した預言者ムハンマドが周囲の人たちに「これで私たちの小さいジハード、つまり戦闘行為は終わったので、これからは心の修養である大きなジハードに邁進するように」と命じたという言い伝えがございます。この言い伝えが、どういう場面で、どう言われたか確定することは難しいとされますが、「精神的な修養を大ジハードとし、軍事的な行為を指す小ジハードはできるだけ控える」という解釈を支持するイスラーム教徒は現代の世界でもたくさんいらっしゃいます。

古典的なジハードの解釈によりますと、たとえ実際に戦闘的なジハードが宣言される場合でありましても、戦闘行為が採用される条件としては、異教徒の外敵の侵攻に対抗するための防衛戦争であること、カリフの指揮のもとにイスラーム教徒が全員一致して参加して行なわれること、一般市民を巻き込まないこと、キリスト教の修道士やユダヤ教のラビなど聖職者に危害を加えないことなど、戦闘的なジハードが容易に実行できない厳しい制限がいくつも設けられています。このような厳しい規定が設けられたために、イスラーム史上、これらの条件を十分に満たすジハードはほとんど起こっていないのです。特に預言者ムハンマドが亡くなった後は、こういう条件を完全に満たすようなジハードは、じつは一度も行なわれていないということができますが、このことを私たちは忘れてしまうわけです。

現代のテロリストたちがどう考えているか。たとえばイラクの中でシーア派とスンナ派、あるいはシーア派同士で争いあうような戦闘的な人たちのジハードについての考え方は、外敵とは異教徒だけではなく、同じイスラーム教徒の枠の中で「本来のイスラームの教えから外れている」と彼らが判断した人たちに対して向けられることになります。「もはや彼らはイスラーム教徒ではない、背教者である、宗教を裏切ったものである、だから敵である」として戦闘行為を行なったり、テロを繰り返したり、暗殺をしたりするということになるわけです。

現代の穏健なイスラーム教徒の方々とお話しておりましても「確かに外から入ってきた外敵に対するジハードの問題は古典的な領域を出ないことが望ましいが、しかしイスラーム世界の内側で、独裁的で私利私欲に走る悪い国王、大統領、為政者がいれば、それに対する反政府運動を起こす場合のジハードは認められるべきではないか」という話をしてくださる方々もたくさんいらっしゃいます。しかしそれにはじつに難しい問題があるわけですが、同じイスラーム教徒同士で内部に向かうジハードは、現実にイラクで起きていますように、さまざまな利害関係の対立や判断や権力闘争を帯びていき、単に宗教的な問題だけではなく、複雑に絡み合った難しい問題が入っていますので、単純にどちらがいいか、悪いかという判断は難しいことです。

ただ預言者ムハンマドが意図した、崇高な精神的な修養を大切にするジハードという考え方が、こんにちでは、同じイスラーム教徒同士が戦う名目になってしまうことは、私などが外から見ておりましても大変悲しいことではないかと思っています。

ジハードの他にもクルアーンには、確かに戦争にかかわる章句がいくつか見られます。ジハードそのものは必ずしも戦争とか戦いにかかわる脈絡の中で使われているわけではありませんが、直截的に戦争や戦闘行為を命じる箇所では次のような章句がございます。

> 神聖な月が過ぎたら、多神教徒を見つけ次第に殺しなさい。また、彼らを捕虜にして閉じ込め、あらゆる策力をもって彼らを待ち伏せしなさい。しかし、もし、彼らが悔い改め、礼拝を守り、喜捨を差し出すなら、彼らの道を開いてやりなさい。実に神は寛容で慈悲深いお方である。(9章5節)

この聖句は「剣の節」とも呼ばれていまして、イスラーム教徒にとっても戦いを強制される大変厳しい教えであります。ここでは「殺せ、閉じ込め」などと直接的な表現で暴力行為が命じられております。「神聖な月」とはイスラームが起こる前のアラビア半島で守られていた一つの伝統で、かつて7月、11月、12月、1月には戦闘行為が禁じられていました。この聖句が啓示されました後、預言者ムハンマドとイスラーム教徒の一軍は神聖月の期間中でも戦闘を行なわなければならないという事態に陥りましたので、それ以降はイスラーム以前の習慣を無効にしてしまいました。

このことから研究者によると「預言者ムハンマドは、イスラーム以前のアラビア半島の伝統を変更してよりいっそう戦闘的にした」と主張する人もあります。しかし、同時にムハンマドの宣教活動を取り巻く事情が、いかに厳しく、困難なものであったかということを、私どもはこの聖句から読み取っていくことができると思います。

しかし、なぜ「殺せ」とか「閉じ込め」という直接的な命令表現で表されたのでしょうか。イスラーム教徒の人たちは、おそらく当時も、そして現在も心優しく「人を殺すことはしたくない」と思っている人たちが多いわけです。これは私たち自身のことを考えても同じことです。やむをえず戦争が起こって、多くの人を殺さなければならなくなった事態を目前にして、「以前から一緒に暮らした馴染みの人たちとも戦わなければならない。宗教活動の中であっても人を殺すのは嫌だ。戦争に行きたくない」という思いを訴えるイスラーム教徒もいたようであります。それに対して「これは神の道だから、そういうことを考えないで戦闘に参加しなさい」という命令として下されたわけであります。条件も何もつけないで、単に「異教徒を見つけたら殺してしまえ」という思想では、決してないことを理解しなければなりません。

> あなた方が不信仰者と(戦場で)出あった時は、(彼らの)首を打ちなさい。彼らを皆殺しにするまで。そして(捕虜の)縄をきつく締め、その後に情けをかけるか、戦いが終わるときまでに身代金を(取りなさい)。(47章4節)

これも大変恐ろしい言葉に聞こえます。宣教活動の中で多くの苦しい戦いが起こったことについて啓示されたもので、一方的に「殺してしまえ」と殺人を教唆するような内容ではありません。しかも興味深いことにこれらの章句の後半部分、次の節には敵が降伏してムスリムの指導者に従うことを条件にして「捕虜を寛容に扱うように」と指示しています。「殺しなさい、捕まえなさい」という聖句の後に「寛容に扱いなさい」というのはすべての箇所ではありませんが、ほとんどの箇所にセットとして啓示されています。(このセット命令について、コメンテーターの四戸先生から戦争の始まる前の啓示と終わった後の啓示とでセットになっている、というご指摘を頂いた。)

クルアーンには確かに戦闘的な命令が数カ所見られますが、しかもこうしてまとめて取り上げますと、なんと恐ろしいことを教えているのだということになりますが、全体でも5、6カ所で決して数は多くありません。逆に平和や寛容をすすめる聖句は100を越えております。

本来、クルアーンには、不信仰者に対するジハードの記述も、強制的に改宗を求める思想も見られないと言われています。「剣の節」はイスラーム教徒に敵対し、イスラーム教徒を殺そうと襲ってくる不信

仰者に対する戦闘的な命令であり、平和裡に共存する人たちに対しても「殺せ」という殺人指令というものでは、決してないわけです。

宗教には強制があってはならない。正に正しい道は迷誤から明らかに(分別)されている。それで邪神を退けてアッラーを信仰する者は、決して壊れることのない、堅固な取っ手を握った者である。(2:256)

これもまた有名な聖句でございまして、イスラームは不信仰者、つまりまだイスラームを信じていない人たちに剣をもって改宗を迫ったのではないことを証明する聖句としてよく使われるものです。確かにイスラームは預言者ムハンマドが亡くなった後の30年間、その後のさらに100年間、猛烈な勢いで地中海世界を中心に世界に躍り出ていきました。信者の数もイスラームの支配領域も、ものすごい勢いで増えていきましたが、決して武力によって改宗を迫ったわけではありません。第2次世界大戦中の日本軍が東南アジアや韓国に神社信仰、皇室崇拝を強制したことを思い浮かべていただければよくわかると思いますが、日本が破れた途端に現地の人々は神社参拝をすぐやめてしまいました。武力で改宗を迫っても、信仰は定着していかないわけです。本当に精神的に心の中から改宗していかなければ、イスラームを理解して改宗していかなければ、信者の数は増えていくことはありません。

このようなクルアーンのわずかな戦闘的な聖句をもとにして、古典時代に「イスラームの家」(信仰者の住む土地)と「戦争の家」(不信仰者の住む土地)を区別する思想が定着していきます。さらに戦闘的ジハードの思想も成立したと言うことができると思います。したがって、「イスラームの教義には本来的に暴力を容認するものがある」という言説は、イスラームの原点である聖典クルアーンの思想に照らしてみれば正しいとは言えないわけです。現代の過激なイスラーム主義者やテロリストたちは、クルアーンの教えそのものではなく、それをもとにして形成された古典的なイスラーム法学思想に基づいて行動していることを私たちは見逃してはならないと思います。

(3)復讐する神と許す神

私どもはイスラームのジハードという言葉を聞くたびに「平和的なキリスト教」「好戦的なイスラーム教」という二項対立の構図を描きがちであります。そしてキリスト教には3世紀に現れた聖戦士セント・ジョージの伝説や5世紀のアウグスチヌスによりますJust War、正義の戦いという思想、それに基づく十字軍運動などの戦闘的で残虐な歴史的事実があることを忘れがちであります。しかし旧約聖書を繙けば、そこにはじつに目を覆いたくなるような殺戮の光景が広がっていることを忘れてはならないと思います。その代表的なものはヨシュアの戦いでございます。

その7度目に(エリコの町をヨシュアの軍勢がぐるぐる回って7度目に回った時)祭司たちが角笛を吹いたとき、ヨシュアは民に言った。「ときの声をあげなさい。主がこの町をあなたがたに与えてくださったからだ。この町と町の中のすべてのものを、主のために聖絶しなさい。・・・(中略)彼らは町にいるものは、男も女も、若い者も年寄りも、また牛、羊、ろばも、すべて剣の刃で聖絶した。(ヨシュア記6:16〜21)

「聖絶」というのは聖なる虐殺、皆殺しでございます。神に命令されて皆殺しを行なったということです。皆殺し、虐殺、裏切り、レイプなどの恐ろしい光景は旧約聖書の中にいくつも、これでもか、これでもかというほど出てまいります。

旧約聖書の描く神は戦争する神でもありますし、復讐する神でもあります。たとえは原初の人間アダムの息子、カインとアベルの物語はよく知られていますが、弟のアベルを殺害したカインは神によって罰を受けるのではなく、逆に選ばれてその後のイスラエル族の祖先となっていきます。その弟を殺害した後のカインと神の言葉です。

カインは主に言った。「私の罰は重くて負いきれません。あなたはきょう、わたしを地のおもてから追放されました。・・・私を見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう。」主は彼に(カインに)仰せられた。「いや、そうではない。誰でも、カインを殺すものは7倍の復讐を受ける。」(創世記4:15)

血を分けた実の弟を殺したカインを神は自分の契約を実行していく民族の祖先として選び、カインを殺したものには7倍の復讐をすると約束をしたわけです。

また新約聖書では絶対的な隣人愛と平和を教えたイエスでさえも次のように言っています。

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは平和をもたらすために来たのではなく、剣(つるぎ)をもたらすために来たのです。(マタイ10:34)

イエスの平和主義を受け継いだと言われるパウロにも意外な言葉がございます。

しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子供を追い出せ。奴隷の女の子供は決して自由の女の子供とともに相続人になってはならない。」こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子供ではなく、自由の女の子供です。(ガラテア書4:30)

これらの旧約聖書と新約聖書の言葉は、聖書に詳しい方やクリスチャンの方は教会での学びの中で、いろいろな背景や象徴的な教えについて学んでこられていると思います。直接的にこれらが殺戮を命じたり、現実に今の世界で戦争や人殺しを擁護したりするものではない、もっと別の恒久的な平和や尊い愛の表現がこういう形になっているのだと、あるいは神の壮大な計画の中の一つの場面として象徴的に比喩的に表現されているのだと、理解されお読みになっておられると思います。

それでは、私たちはクルアーンに描かれたさまざまな戦闘シーンや暴力的な表現などを、キリスト教の聖書を読む時と同じように神の壮大な計画の一コマとして比喩的、象徴的に読むことができないのでありましょうか。

パウロの言葉に戻りますと「奴隷の女の子供」と「自由の女の子供」、ここで言われる自由の女とはアブラハムの正室のサラであり、奴隷の女とは彼の側室のハガルのことです。ハガルはイシュマエルという長男を産みますが、そのイシュマエルはアラブ族の祖となったと言われております。サラからはイサクが生まれています。イサクはイスラエル族の祖になっていきます。先のパウロの言葉によりますと、正室の子どもこそが神に選ばれた民族の正しい子どもであるということになるわけです。アブラハムの側室のハガルからはアラブ族が、正室のサラからはユダヤ民族がということから、パウロが言った「自由の女の子供」とは、キリスト教徒もユダヤ教徒も指すはずですが、このパウロの考え方から「その後のユダヤ人の差別や虐待、20世紀のホロコーストにつながるキリスト教の教えが見られる」と指摘するキリスト教の学者もおります。同時に、ハガルから生まれたイシュマエルを祖とするアラブ人には「奴隷の女の子供」だという考え方が適用され、それが十字軍の時のサラセン人、イスラーム教徒への攻撃と虐殺などの口実となったと見なされることもあります。

念のために、これは欧米の学者の見解であって私の考えではございません。

このように平和主義的であり、神の前の絶対平等と隣人愛を標榜したイエスやパウロの教えの中にも、細かく見てまいりますと、もちろん背景には比喩的、象徴的な意味合いを考えなければいけないわけですが、実に恐ろしい表現が出てくることになります。

(4)服従と平和

それではもう一方の平和的な言葉を採り上げて

みたいと思います。クルアーンの平和的な聖句をみてみましょう。

だが、あなたがたと盟約した民に仲間入りした者、またはあなたがたとも自分の人々とも戦わないと、心に決めて、あなたのところにやってくる者は別である。もしアッラーの御心ならば、かれ(神)はあなたがたよりもかれらを優勢になされ、あなたがたと戦うであろう。それで、もしかれらが身を引いて、あなたがたと戦わないで和平(salam)を申し出るならば、アッラーはかれらに対して戦う道をあなたがたに与えられない。(4:90)

あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当にアッラーは侵略者を愛さない。(2:190)

これはクルアーンの中でも平和的な聖句だと思われる箇所であります。「あなたがたと戦わないで和平を申し出るならば」で「平和」にsalamという言葉が使われています。イスラーム教徒の先生方から聞きますと、多くの方が「イスラーム(Islām)という言葉には『平和にすること』という意味が含まれている」とおっしゃいます。同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)では海外からの研究者を招いてシンポジウム、セミナー、講演会、ワークショップが行なわれていますが、そのためにシリア、エジプト、イラン、アジア、アメリカなどからいらしたイスラーム教徒の研究者、宗教家の方々と意見交換、講演を行ないます。そのほとんどの先生方は「イスラームという言葉には『平和にすること』という意味が含まれている」とおっしゃっています。

しかし私たちが注意しなければいけないのは、ここでいう「平和」(salam)という言葉は、私たち日本人が想定する平和とは異なるということです。クルアーンが語る平和とは「唯一の超越の神の命令に人類が絶対的な服従をすることによって世の中に戦争や騒乱がなくなり神の意思があまねく行き渡ること」を指しています。このために、他宗教の信者にとっては「この平和は奴隷の平和でしかないのではないか」と言われることになります。上記のクルアーンの聖句も、そういう意味での平和であると考えることができるかもしれません。

このことをもう少し詳しく説明しますと、「イスラームはテロリストの宗教だ」とおっしゃる件の若い研究者が「イスラームが他宗教に対して融和的で寛容な共存を図るとしても、それは他宗教の信者たちがイスラームの優位性を認めて二級市民に堕すこと、つまり奴隷の平和でしかないのだ」とおっしゃることになるわけです。(「奴隷」という用語には語弊があるかもしれない。イスラームでは一般にユダヤ教徒やキリスト教徒などの聖典の民は奴隷ではなく保護民とされるが、この研究者の持論の表現として、このまま使う。)

しかし私たちは考えてみなければなりません。人類の歴史が始まって以来、全世界が一様に同じく平和になった時期があったでしょうか。理想的には平和とは全世界に一様に社会的にも精神的にも平穏で騒乱のない状態が現れてくることでありますが、それはじつは夢物語にしかすぎないわけです。現実には一方の国や地域の平和は、対立する国や地域の平和ではありえませんし、一つの宗教やイデオロギーの平和は、他の宗教やイデオロギーの平和ではないからであります。

そういう意味では、クルアーンの平和は必ずしも私たちの考える平和と矛盾するものではないのではないでしょうか。つまり私たちはいつも心から平和を希求しますが、その平和もすべての人々にとって平和ではないということを忘れているわけです。「イスラームの平和が、異教徒にとって奴隷の平和でしかない」ことは、むしろ平和という言葉の意味から考えて当然ではないかと思われます。イスラームの平和がユダヤ教徒、キリスト教徒、仏教徒にとって奴隷の平和であるからといって「そんな平和はけしらかん、意味がない」と切り捨てることはできないと思うわけです。立場を変えてみますと、現在でも日本人の平和や経済的な繁栄は、韓国や中国の人々にとって本当に同じく平和や繁栄であるでしょうか。そうではないと私は思います。

イスラームは世界の諸宗教の中でも理想的な側面のみを標榜することはせず、きれいごとを言わない、宗教についても人間についても、長所も欠点も極めて正直に表明する宗教であると思われます。人間の行なう平和がじつは相手に対して奴隷の平和にすぎない可能性を包み隠さず表現していると見てとることができましょう。たとえ奴隷の平和であっても、ウマイア朝からオスマン帝国まで実に1400年間のイスラーム支配のもとで、保護民であるユダヤ教徒やキリスト教徒だけでなく、多神崇拝者、偶像崇拝者とされるゾロアスター教徒、仏教徒、ヒンドゥー教徒までが概ね平和裡に暮らすことができ、さまざまな形でイスラーム文明の興隆に貢献したばかりではなく、自らの文化や思想をも発展させてきた歴史的事実を考えると、ある意味でそれは「平和」であった、たとえ奴隷の平和であっても平和な世界であったということができるのではないでしょうか。

(5)秩序の宗教

先ほども申しましたが、イスラームの古典期に成立した教義には、人間を「信仰者」と「不信仰者」に分ける処遇がございます。イスラーム支配下に入り、宗教法が完全に維持されている世界を「イスラームの家」とし、未だイスラームの信仰を受け入れない人々が暮らす世界を「戦争の家」として区別するシステムです。戦争の家に属する人々に対して宣教活動を行なうことがジハードとして受容されてきたことも事実でございます。軍事的な領土拡大運動はこの宣教活動を伴っていたことも歴史上多々見られますが、イスラームの宗教的版図の拡大は、宣教や軍事的強制によるものよりも、むしろイスラーム政権の巧みな支配や宗教的寛容によるものの方が大きいわけです。

しかし軍事的手段であれ、平和的手段であれ、イスラームの宣教活動は預言者ムハンマドの時代から今日までさまざま形のジハードとして受け継がれていることは否めません。「さまざまな形の」ジハードと申し上げた中には「戦闘的な」という意味も含まれますが、ほとんどの場合は「平和的な」ジハードであったという意味だということができます。

繰り返しになりますが、同志社大学一神教学際研究センターで毎年、多くのイスラーム世界の研究者、学者、宗教家をお呼びしますが、すべての先生方は「イスラームは平和な宗教である」とおっしゃいます。当然ながらそこには現今のイスラーム蔑視に対抗するための護教的な姿勢が見られるかもしれませんが、しかし先生方はこのようなイスラームの平和を神への絶対的服従と同時に戦争がなく、平穏な状態という意味にも用いていらっしゃるように私は理解しております。

アメリカで活躍しているシーア派のインド系の方ですが、アブドゥルアジーズ・サッチェディーナという研究者がいます。この先生は「クルアーンの思想には本来的な宗教多元的な平和主義が見られる」と主張し、次のように言われています。

宗教的多元社会を指導する基本的な原則は、クルアーンの承認がなければ、言い換えれば他の宗教に救済宗教としての価値を認めることがなければ、歴史を通じて宗教的少数派に対するイスラームの待遇の顛末は、非キリスト教徒に対するヨーロッパの扱いと異なるものではなかったであろう。(*The Islamic Roots of Democratic Pluralism*、*Oxford, 2001, p.25.*)

ヨーロッパの社会では非キリスト教徒に対してヨーロッパ・キリスト教社会はどのような待遇を与えてきたか。ユダヤ人への差別だけでなく同じキリスト教の中でも異端とされたさまざまなグループに対する異端宣告、異端裁判、魔女裁判などを見ればわかるわけですが、そういう他宗教・他宗派に対する差別的な待遇はイスラームの支配下ではほとんど

見られなかったわけです。サッチェディーナ先生はクルアーンの49章13節を引用しながら「クルアーンによれば人類の多様性は避けられない緊張を生み出すのではなく、特定の宗教がその共同体のために共通の信仰や価値観や伝統を明らかにするために不可欠なものである」と主張されています。

> 人びとよ、われ（神）は一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたのうち最も主を畏れる者である。（29:13）

これは、「この世の中にさまざまな宗教があり、異なった宗教を持つ人々が存在することはまさしく天地の創造主の神の意思である」という考え方であります。イスラームは平和ではなく服従を意味していることを、このサッチェディーナ先生も認めておられるわけですが、それは「信者へ要請される精神的な服従であって、異教徒の屈辱的な服従を意味しているのではない」とされています。

この考え方を支持する人もいれば、反対のご意見を持っている人もいらっしゃると思いますが、「イスラーム」という意味が、日本人が一般的に考える「平和ではない」という観点から、同志社大大学の中田考先生は「イスラームは平和の宗教ではなく、秩序の宗教である」とおっしゃっています。

平和と秩序は全く相反する概念なのでありましょうか。そもそも人間の住む世界は秩序がなければ、ものごとの正しい順序や筋道が実行されなければ、社会も人間の精神も混沌として無法状態に陥ってしまい、平和裡に運営されることはできません。時代や状況によってさまざまな立場がありますが、それでも平和と秩序は相互に切り離されることができない、倫理思想の観点から見ても、平和と秩序は同時に同じことを言い換えたにすぎないのではないかと思われるわけです。

海外のイスラーム教徒の先生方が、一様に「イスラームは平和な宗教である」とおっしゃるのに対して「イスラームは平和な宗教ではない」という考え方があるとすれば、その平和は、私たちが無反省に考える、ある意味のんびりした平和ではないということです。つまり日本人が普段考える平和ではないということなのではないかと思います。

（6）クルアーンの寛容性の再考を

これまで見てまいりましたように、旧約聖書や新約聖書の黙示録に見られる戦争描写に比べてみますと、極めて少ないということができるものの、確かにクルアーンの聖句には戦争や殺戮を命令し肯定する表現が見られることも事実であります。しかしキリスト教では聖書に記されている多くの殺戮や暴力の描写は現実の政治的な本当の戦争を指したり、命令したりしているのではなく、信者の精神的、宗教的な魂の戦いを指し、宗教的修養や鍛練の比喩として把握されております。もっともユダヤ教にもキリスト教にも、聖書の記述を文字通り受け止めて教条主義的に実行しようとする一群の人々、今、特にアメリカの政治家に見られるわけですが、ユダヤ教原理主義、キリスト教原理主義という思想を持った人々が存在し、国際政治の上に大きな力を及ぼしていることも周知の事実でありますが、本日はこの問題には、これ以上触れません。

もとから宗教的、精神的次元だけでなく、日常的、社会的、経済的な次元を含んだ総合的な宗教として展開してきたイスラームでは、理念的に宗教と政治を切り離すことはできません。クルアーンの「戦え」「殺せ」という命令をイスラーム法の解釈に基づいて文字通り戦争やテロ行為への命令として受け入れる思想が成立してくることも否めないことであります。そういう意味では、ほんの一部のテロリスト集団を対象としているのであったとしても、イスラームに対して批判的で厳しい姿勢を説く学者の指摘が全くの的外れであると決めつけることもできないかもしれません。ある一定の決まった方向だけからイスラームの教義を近視眼的に見るならば、確かにそのような立場も一理あるといわざるをえないかもしれません。

しかしそれでは、中世のイスラーム世界がなし遂げてきた、ユダヤ教徒とキリスト教徒との寛容で平和的な共存体制をどのように説明し、理解すればいいのでしょうか。もっとも反対派によればこの共存体制、すなわち「ユダヤ教徒とキリスト教徒を保護民として扱う保護民政策」は、聖典の民を二級市民として差別的に扱うことにほかならなかった、ということになるのでありますが、しかしどのような立場であっても、私たちがイスラームの名のもとに行なわれるテロリズムや軍事的暴力を解決しなければいけないという願いと姿勢を持っていることは明らかでございます。テロリズムを解決するためには、イスラーム教徒のテロについての思想を根本から学び直し、表向きの平和的なイスラーム教義の背後に潜んでいるテロや暴力を容認する思想を明るみに出して検討し、それによって新しい観点から世界のテロ対策を考え直さないといけないと思います。テロや暴力、戦争や虐殺は、当事者が誰であれ、決して行なってはならない人類の生存に対する罪であると私は考えております。

そのような立場から、私はイスラームの教義や思想について暴力的な側面をことさら強調することが、テロの撲滅や人権の擁護、世界平和につながるとは、とても思えないわけです。つまり「平和的な表向きのイスラーム教義が本当のものではなく、背後に潜んでいるテロや暴力を容認する教義こそが本当のイスラームの姿だ」と指摘することが平和的解決につながるとは、私は決して考えておりません。イスラーム思想の背後に密やかに暴力を容認する妖怪のような教義が潜んでいることが事実であったとしても、それは他の宗教にも、特に絶対的な平和や隣人愛を標榜するキリスト教においても、じつは等しく見られる現象であるからです。世界のどの宗教にも平和的な側面と暴力的な側面とが併存しているからです。

しかしそれにもかかわらず、イスラーム世界は、ごく近年に至るまで歴史の過程のほぼ全域で、異教徒たちと平和裡の共存をなし遂げてきたという歴史的事実がございます。私も、イスラーム世界で多くの政治的、宗教的衝突や内紛や騒乱、覇権志向の戦争などが行なわれてきたことを無視しなさいというつもりはありません。しかし戦闘規模や死者数、虐殺行為などは他の地域と比べても極めて少なかったことは、ユダヤ教徒の歴史学者たちも、今日、認めていることです。

まして現代のイスラーム教徒の大多数の人々が異教徒に対して軍事ジハードを実行して「イスラームの家」を拡大しようと考えているわけでもありません。イスラーム教徒の多くの人たちは「イスラームの家は多元主義的共存の中で、平穏な平和の中でなし遂げられるものだ」と考えていると私は思っております。

悲しいことに、宗教が掲げます理想的な理念と現実の暴力的な行動は、じつはコインのうらおもてのような表裏一体の現象であります。隣人愛を掲げ、敵をも愛せよと教えた究極の平和主義宗教であるキリスト教は、近年に至るまで十字軍、異端訊問、魔女裁判、植民地支配などの苛酷な暴力行為の擁護者となってまいりました。現代では特にアメリカの福音主義キリスト教会がパレスティナ紛争やイラク戦争を黙示録的な代理戦争として容認し、巨大な軍事的、経済的支援を行なっております。反対にジハードを教義に持ち、政教一致を理想として現実の政治活動の中で宗教的理念の実現を希求しているイスラームでは、歴史の過程で表面上の峻厳な文言とは裏腹に、異教徒や異文化に対しても寛容で温和な政策を採用してまいりました。

レオン・ポリヤコフという学者は、『反セム主義の歴史』という1975年にロンドンから出た本の中で、このように言っています。

> イスラームは人間の限界と弱さを取り込んだ人間の尺度にあった宗教である。一方でキリスト教の心優しい説教は、人間の歴史がこれまで知ら

なかったほどの最も戦闘的な最も極端な文明を主宰したが、他方、ムハンマドの好戦的な教えは、より開放的で、より寛容な社会を建設した。(*A History of Antisemitism*, Vol.1, London, 1975, pp.24-25.)

ポリアコフ氏はユダヤ教徒かもしれませんが、このように述べているのが大変面白いわけで、この見解はキリスト教とイスラームの比較の上で、まさに象徴的な見解であろうと思われます。

したがって、イスラームは本来的にテロや暴力を容認するという主張を、現代の一部のテロリストの行動規範として見ることには、大きな危険が伴うように思うわけです。確かに現実に自爆テロが収まらない、多くの市民や女性や子どもも巻き込むような戦闘行為が、またかと思うほど毎日のように続いています。今日は死者が50人、今日は20人というような新聞記事を見て、その数字にうんざりしてしまう毎日ではありますが、イスラームが本来的にテロや暴力を容認するという主張を現代の一部のテロリストの行動規範として見てはいけないと思います。またこのような「イスラームは本来的にテロや暴力を容認する」という主張は、クルアーンの主張と照らし合わせて、決して正しい主張でないということを改めて見直し、考えていくことが必要だろうと思います。

しかもこのような暴力やテロを、クルアーンの命令としてイスラーム教徒多数派の思想であると決めつけてしまうならば、イスラームをめぐる問題の解決はまさに不可能となってしまうと思われます。なぜならば、イスラームはもともと暴力的な思想や教義であって、それを信じているのであるとすれば、イスラーム世界の外側にいる私たちにテロリズム反対の声を上げようとする意欲を失わせてしまうことになるからです。

そのために、私たちがイスラームへの偏見、誤解や蔑視を克服して、人間としての共通性という原則の上に立って、クルアーンが教えた本来の思想に立ち返り、その理想を真摯に学ぶことによってムスリムの多数派と連帯していくことが、今ほど求められている時代はないのではないかと思います。私たちは、「イスラームは秩序の宗教である」という意味を今、真面目に尊敬を持って噛みしめ、学ぶ必要があるのではないでしょうか。

最後に私の好きなクルアーンの聖句をお読みしておきます。

そのことのためにわれは(神は)イスラエルの子孫に対し、掟を定めた。人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである(と定めた)。そしてわが使徒たちは、かれらに明証を齎した。だが、なおかれらの多くは、その後も地上において、非道な行いをしている。(5:32)

私どもが自分の立場や信条や思想や宗教を離れて、世界のさまざまな宗教を客観的に学び、多くの人たちが信じている宗教の理想とする側面を正しく把握していくことが、今日、世界の中でのさまざまな宗教や文化の共存と平和につながっていくのではないかと、私はいつも思っております。このような考え方が同志社大学一神教学際研究センターの大きな目的でもあるかと思います。

一方で「イスラームは本来的に暴力やテロを容認するけしからない宗教である。だからイスラーム教徒たちが暴力やテロを本気で撲滅しようとしないから、黙認し、中には支援しようとする人たちがいるから、世界中でテロや暴力がなくならない」という声高な主張が一言でもあれば、営々と築き上げてきた私たちの努力が一瞬にして無駄になってしまう可能性があります。

しかし長いイスラームの歴史から考えてみますと、確かに現在、イスラーム教徒は非常に苦しい立場にありますが、信者の数から見ますと16億人という膨大な信者数を擁しておりますので、私は個人的にはあと5年でキリスト教徒数を追い抜くのではないかと思っております。イスラーム蔑視という今の情報社会の中で、イスラームに対する批判的な言説が大手を振って罷り通っている中にありながら、多くの若い人たちのなかで、日本人も含めてイスラームに改宗する人がどんどん増えてきている現状を、もう一度考えて見てみなければなりません。

信者の数から考えるとイスラームは発生以来、今が最も勢力のある時代かもしれません。何を持って勢力があるかないか、遅れているかいないか、後進地域かどうかというのは難しい尺度であると思います。ともかく世界中で多くの信者数を占めるイスラームに対して真摯に学び、その理想を感じ取っていくことは、じつは私たちのアイデンティティを見直し、もう一度学び直すことでもあります。

私は研究者としてイスラームを研究しておりまして、専門はイスラームの古典思想ですが、古典の神学思想を学ぶことによって、私自身のアイデンティティ、私自身の信仰を、もう一度問い直す作業の機会を神が与えてくれたものだと思っております。

今日はお聴きくださいまして、ありがとうございました。

CISMOR　10月22日

クルアーン解釈からみるジハード論

筑波大学大学院教授　塩尻 和子

講演の資料

クルアーンの引用は宗教法人日本ムスリム協会発行『日・亜対訳聖クルアーン』により、おもな注釈書としては『ジャラーラインのクルアーン注釈』(中田香織訳、中田考監訳)によった。(5章35節)のように「・・・記」「・・・書」などの記入がないものは、すべてクルアーンの引用である。聖書は新改訳(日本聖書刊行会)を用いた。

(太字にした言葉はジハードに関連する用語が用いられている箇所を指す。)

①あなたがた信仰する者よ、神(アッラー)を畏れ自分の義務を果たして神に近づくよう念願し、神の道のために奮闘努力しなさい。あなた方は恐らく成功するであろう。(5章35節)

②本当に信仰して移住した者たち、財産と生命を捧げて、アッラーの道のために奮闘努力した者たち、またかれらに避難所を提供して援助した者たち、これらの者は互いに友である。(8章72節)

③預言者よ、不信者と背教者に対し奮闘努力し、彼らに厳しく対処せよ。かれらの住まいは地獄である。何と悪い帰り所であることよ。(9章73節)

④アッラーの道のために限りを尽くして奮闘努力しなさい。神はあなたがたを選ばれる。この教えは、あなたがたに苦業を押しつけない。これはあなたがたの祖先、イブラーヒームの教義である。(22章78節)

⑤神聖な月が過ぎたら、多神教徒を見つけ次第に殺しなさい。また、彼らを捕虜にして閉じ込め、あらゆる策力をもって彼らを待ち伏せしなさい。しかし、もし、彼らが悔い改め、礼拝を守り、喜捨を差し出すなら、彼らの道を開いてやりなさい。実に神は寛容で慈悲深いお方である。(9章5節)

⑥あなた方が不信仰者と(戦場で)出あった時は、(彼らの)首を打ちなさい。彼らを皆殺しにするまで。そして(捕虜の)縄をきつく締め、その後に情けをかけるか、戦いが終わるときまでに身代金を(取りなさい)。(47章4節)

⑦宗教には強制があってはならない。正に正しい道は迷誤から明らかに(分別)されている。それで邪神を退けてアッラーを信仰する者は、決して壊れることのない、堅固な取っ手を握った者である。(2章256節)

⑧その七度目に祭司たちが角笛を吹いたとき、ヨシュアは民に言った。「ときの声をあげなさい。主がこの町をあなたがたに与えてくださったからだ。この町と町の中のすべてのものを、主のために聖絶しなさい。

・・・(中略)彼らは町にあるものは、男も女も、若い者も年寄りも、また牛、羊、ろばも、すべて剣の刃で聖絶した。(ヨシュア記6章16節～21節)

⑨カインは主に言った、「私の罰は重くて負いきれません。あなたはきょう、わたしを地のおもてから追放されました。・・・私を見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう。」主は彼に(カインに)仰せられた。「いや、そうではない。誰でもカインを殺すものは7倍の復讐を受ける」(創世記4章15節)

⑩わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは平和をもたらすために来たのではなく、剣(つるぎ)をもたらすために来たのです。(マタイ10章34節)

⑪しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子供を追い出せ。奴隷の女の子供は決して自由の女の子供とともに相続人になってはならない。」こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子供ではなく、自由の女の子供です。(ガラテア書4章30節)

⑫だが、あなたがたと盟約した民に仲間入りした者、またはあなたがたとも自分の人々とも戦わないと、心に決めて、あなたのところにやってくる者は別である。もしアッラーの御心ならば、かれ(神)はあなたがたよりもかれらを優勢になされ、あなたがたと戦うであろう。それで、もしかれらが身を引いて、あなたがたと戦わないで和平(salam)を申し出るならば、アッラーはかれらに対して戦う道をあなたがたに与えられない。(4章90節)

⑬あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当にアッラーは侵略者を愛さない。(2章190節)

⑭人びとよ、われ(神)は一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたのうち最も主を畏れる者である。(49章13節)

⑮そのことのためにわれは(神は)イスラエルの子孫に対し、掟を定めた。人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである(と定めた)。そしてわが使徒たちは、かれらに明証を齎した。だが、なおかれらの多くは、その後も地上において、非道な行いをしている。(5章32節)

部門研究1　2005年度第4回研究会

日　　時／2005年10月22日（土）
会　　場／公開講演会:同志社大学今出川キャンパス　神学館礼拝堂
　　研　究　会:同志社大学今出川キャンパス　寒梅館6階会議室
発　　表／講演会:塩尻和子（筑波大学大学院人文社会科学研究科教授）
　　研究会:中田　考（同志社大学神学研究科教授）

スケジュール

13:30〜15:30　公開講演会／発表:塩尻和子「クルアーン解釈から見るジハード論」
15:30〜16:00　休憩
16:00〜17:00　研究会／発表:中田　考「ジハードと『イスラーム世界』」
17:00〜18:00　ディスカッション
18:30〜20:00　懇談会

研究会概要（塩尻氏発表原稿は「公開講演会報告」の項に掲載）

2005年10月22日に同志社大学の神学館礼拝堂において、「クルアーン解釈からみるジハード論」というタイトルで講演会が行われた。発表者は、塩尻和子氏であった。本講演は、三つの部分から構成されていた。

第一は、クルアーンの章句と預言者ムハンマドの言行から、ジハードに関連する数ヶ所の記述を巡る解釈を含む部分であった。塩尻氏は、クルアーンにおいて41ヶ所の章句のうち10ヶ所のみが戦いを意味することから、クルアーンにおける「ジハード」の「聖戦」としての一般的な理解に疑問をもち、ジハードの意味の範囲は戦いのみに還元されないと指摘した。次に同氏は、預言者ムハンマドが遠征からの帰路に唱えたとされている「小戦から大戦に戻る」というハディースを挙げて、イスラームにおいては戦場での戦いより、悪を命じる己との戦いがより重視されているということに注目した。さらに、現代イスラーム世界においてテロという呼称のもとで捉えられている非イスラーム教徒に対する戦争とムスリム同士の戦争が、どこまでイスラームにおける「奮闘努力」にあてはまるかという現代的問題にも触れた。

第二部においては、「イスラームは暴力を容認するので、キリスト教の方がより平和的な宗教である」という言説がとりあげられた。同氏は、十字軍という歴史的な事実、5世紀のアウグスティヌスによる「正義の戦い」やその原理となっているキリスト教の聖書から「暴力」を意味する数ヶ所の章句などを挙げ、キリスト教にも暴力的な側面が含まれていると論じた。さらに、オスマン・トルコ帝国の支配下において、庇護民が平和に暮らしたという事実と、クルアーンにおける平和的な章句も挙げた。第二部の結論として塩尻氏は、いかなる宗教の聖典においても暴力的と平和的な側面があると示唆した。しかし、暴力を意味するこれらの章句は、その歴史の過程における実践はともかくとして、しばしばされるように文字通りの解釈のみではなく、比喩的にも解釈できるという可能性が論証された。

発表者は、講演の最後の部分である第三部で、「イスラームが暴力的でもなく平和的な宗教でもなく、秩序の宗教であると言われる」という点についても触れ、宗教は、人間社会にとってなくてはならないものである秩序を持続するためには、暴力を容認する可能性がある点に注意すべきであると明言した。

講演会の後、会場を移して「部門研究１」研究会が開始された。

中田氏は、クルアーンにおけるジハードに関する章句を議論した。同氏は、クルアーンにおいて、非ムスリムの親がイスラーム教徒の子供をイスラームから逸脱させようとする努力が「ジハード」という単語で記されているという点から、ジハードの「聖戦」としての訳語を批判し、「奮闘努力」という和語を提案した。次に、イスラームは暴力を容認するか否かという問いを挙げた同氏は、イスラームにおける暴力の存在を認めたが、イスラームは暴力をコントロールすると主張した。また、イスラーム支配下において平和で暮らした非ムスリムの状況を「奴隷の平和」と名づける最近の批判に対して、奴隷と庇護民の違いを明らかにした。彼によれば、後者は非ムスリムだけであるが、前者はムスリムと非ムスリムを含むと指摘し、庇護民を奴隷という呼称で描写することの誤りを提示した。

発表の後、異なる分野のプロパーであり、イスラーム世界を共通の専門とする参加者たちは、中田氏による発表と塩尻氏による講演の内容にふまえながら、メディア、思想研究のような異なる視点から、「ジハード」を取り上げた。以下に、主なディスカッションのポイントを挙げる。

イラン・イラク戦争の事例をとって、スンナ派とシーア派の違いが検討された。これについて、シーア派とスンナ派の間にそれほど大きな違いがなく、シーア派においてはイマームの不在によりジハードが開始できず、正統防衛の戦いが許される等の違いを除けば、かなりの部分が共通していると述べられた。また、ムスリム間における戦いの問題も挙げられた。このような戦いをジハードと呼ぶことの曖昧さに注目され、イランとイラクの戦争においては、イラン側はジハードという名前より「聖なる防衛の戦い」という呼称を使用したことが例証された。

そのほかには、スーフィズムにおけるジハード論とその実践も考察されるべきとの指摘もあった。スーダンにおけるマフディー運動や北アフリカにおけるサヌースィー教団とイドリースィー教団による植民地化に対するジハードなどのようなスーフィーたちによるジハードが例に挙げられた。

最後に、ジハードが研究されるとき、問題になる幾つかの点が今後の課題として挙げられた。例えば、イスラーム以前の宗教と民間信仰のジハードへの関与、ジハードにおける殉教者の問題、日本において一般の人々が理解できるようなジハードの説明の必要性などに関する考察の不足等が提起された。

（COE奨励研究員・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程　ダニシマズ・イディリス）

ジハードと「イスラーム世界」

同志社大学大学院神学研究科教授
中田　考

塩尻先生は、問題意識として「現代、イスラームが暴力を容認する宗教であるとされているが、このことは決してこれからの世界を平和にしない」と話をされました。このことはその通りだと思います。ただ私はアプローチの仕方が少し違いまして、「イスラームが暴力を容認する宗教ではないか」という会場からの質問に対して、塩尻先生は「人間は天使ではない、天使になろうとすると悪魔になってしまう」と。的確な答えだったと思います。しかしインターネットで「イスラームは暴力を容認する宗教である。暴力を容認する宗教はけしからんから殺してしまえ」とよく出てきます。「暴力を容認する」という言葉自体が持っている曖昧さ、イスラームにはそもそもそういうディスコースはありません。これは西洋のヘゲモニーのもとでなされる問いであります。「イスラームは平和の宗教である」、あるいは「イスラームは平和な宗教ではなく秩序の宗教である」という言説が流行っていますが、「これは問題設定自体が間違っている」と最近、私は答えるようにしています。「暴力を容認する」というのはいい加減な言葉で、実際には「暴力を容認しない宗教はない」。暴力があるとすれば、これに対しては対応は二つしかなく、「暴力を振るう人間を止める、殲滅する」か「暴力をほっておくか」のどちらかしかない。「暴力を容認しない」ということはありえない。積極的に暴力を使って止めるか、暴力をあるがままに放置するしか選択肢はない。念力をつかって「止まれ」と言っても止めることができない以上、暴力を容認しないことはありえない。人間もそうですし、キリスト教徒も仏教徒もシーク教徒も同じです。猫でも犬でも同じです。全く意味を持ちません。そもそも「暴力を容認するかどうかという問い自体が無意味だ」と身も蓋もなく答えるようにしています。こういう議論自体が成り立たない。したがってもっと細かいところ、ディテールを論じていくしかないと思うわけです。

聖典解釈でクルアーンの「ジハード」に関する言葉、ジャーハダという派生語を全部取り出し、解釈をつけています。アル＝マハッーリーとスユーティーが書きましたクルアーンの注釈書、ジャラーラインの注釈書、これはスンナ派のイスラームでよく読まれる標準的な注釈書です。1巻でおさまる簡潔なものですが、スンナ派でよく読まれます。中田香織が訳して私が監訳して、3巻目が最近出版され完結しました。

クルアーンの日本語訳。注釈書の本文は15世紀に書かれたもので、エジプト人のイスラームの人が書いたもの。十字軍も終わってモンゴルとの戦争も終わり、戦争の真っ只中ではないイスラームが伸びていた時代、近代の植民地支配の歪みがない時代です。その脚注はスライマン・ジャマルという人、18世紀のエジプト人です。西洋の影響がある時代のものです。

基本的に戦争にかかわる言葉は「ジハード」という言葉と「キタール（戦闘）」という言葉があります。ジハードの方が広い意味で、キタールは狭い意味です。ムスリム教会訳もジハードは「紛争」と訳していまして、キタールは「戦闘」、戦いとなっています。ジハードはほとんどが戦闘とも理解できる、あるいはそうでないとも理解できる意味合いを持っています。法学の用語では「戦闘」、そうでない時は戦闘ではない。

『われらは人間に、自分の両親に対する善を命じた。だが、もし彼ら二人（両親）がおまえに、われと並べておまえに、それについて知識のないものを同位者として配するよう奮闘したなら」（29:8）。ここでジャーハダという言葉が出てきます。

『だが、もし彼ら二人（両親）が、おまえにそれについての知識がないものをわれに共同者と配するようおまえと奮闘するなら』（31:15）と出てきます。クルアーンの用法を見ると、ジハードは必ずしもムスリムの神のために努力という意味ではなく、ジハードのもともとの意味は「努力する」ことですが、ジャーハダとなると違うベクトルを持った相手がいて、それに対する努力をする意味になります。これがもともとの意味で、クルアーンの中で特化されていくわけです。これはイスラーム学の基本ですが、イスラーム学の本では、言葉を説明する時には、クルアーンが下される前の、もともとのアラビア語、ジャーヒディア時代の言葉の意味を「ルガタン」と言いますが、それで説明して、今度は「シャリアン」の中で、クルアーンか下されたことによって、クルアーンと預言者ムハンマドの言行録の中で新しく与えられた意味においてどうなっているか。シャリアンの説明があって、その次に「ウルファン」という慣用的な表現としてどうなっているか。その時代の慣用としてどう使われているか。さらに「イステラーハン」、専門用語として、法学の積極的専門用語として、神学の専門用語として、スーフィズムの専門用語としてどんなふうに使われるかという四つのレベルで。これが二つになったり、三つになったりすることもありますが、基本的には「語源的な意味」と「クルアーンの啓示以降の意味」「その時代の慣用的な意味」そして「専門用語としての意味」、この四つの意味を説明した上で議論を始めるのが一般的なやり方です。

ジャーハダという言葉も、最初の意味では「神の道」というのがなく、単に二つのベクトルの違ったものが「せめぎ合うところで力を尽くす」ということが、31章15節と29章8節で「イスラーム教徒と多神教徒が努力する」という意味で、ジハードという言葉が出てきます。この用法は後世ではほとんどなくなりますが、全くなくなるわけではありません。異教徒のジハードというのは珍しいですが、なくはありません。専門用語ではなく、語源的な意味として使っているわけです。

言葉の説明としてジハードという言葉、ジャーハダの名詞形ですが、「大ジハード」と「小ジハード」がありまして、小ジハードは「敵との戦闘」で、大ジハードは「克己」という意味でした。ハジースの中にも出てきます。これが専門用語となった場合、克己の意味でジハードを使うことはあまりありません。ジハードの意味をはっきりさせようとして「ムジャーハダ」という言葉があり、スーフィズムの文脈で自らと戦う、欲望と闘うということはジハードではなく、脚注で『奮闘した者たち』アルーハサン（スーフィズムの初めの人と言われていますが）によれば、欲望に抗う戦いのことである。また奮戦（mujahadah）とは服従のための忍耐である、と言われる」（29:69）と、この言葉を使うことが多い。イスラームには意味の重層性がありまして、それぞれの文脈によって意味が変わってくる。その意味が明らかにされた時には専門用語的な意味になる。ジハードを専門用語として使う時には基本的に法学のキタール（戦闘）の意味で使います。

ジハードというのは戦闘の意味ではないというのは、護教でも何でもなく、語源としてはそうなるということであります。

キタールは戦闘の意味ですが、これはジハードより用例が多い。ジハードの用例は記載したものがすべてです。命令形も平叙文もすべて挙げています。キタールはもう少し多い。クルアーンの中で命令形とジハードと関係があるところを出しています。

キタール、戦闘という意味が決められたのは、『戦いが』不信仰者に対する戦いが、『書き定められた』義務づけられた（2:216）。これがクルアーンの義務の話です。平叙文では、戦闘に関する最初の啓示。

『戦う者たちには、不正を被ったがゆえにゆるされた。まことに、アッラーはかれらの援助に関して全能なる御方。(22:39)』。『戦う者たちには』信仰者たちには、『戦う者たち』とは戦いを望者たち、ということである。『不正を』不信仰者たちの彼らに対する不正によって、『…がゆえに』…ことが理由で。このように『許された』戦うことが、これはジハードについて啓示された最初の節であるということです。

クルアーンの中で、先程は「義務」で、ここでは「許された」とあります。これは時間の違いでありまして、最初の啓示ですので、これが下るわけです。というのは許される前は禁じられていたわけです。この前のヒジュラという預言者ムハンマドがメッカで宣教していた時代、マッカに移って国家をつくる前、その時には一切の抵抗が禁じられていました。戦争だけでなく、いかなる迫害を受けても個人的に戦うことが禁じられていたわけです。ところがそれがある時点から戦うことが許される。力を持ってから、国家をつくってからです。珍しく、ここには理由が書いてあります。イスラームの規定は必ずしも理由が書いてありません。理由がない方が多い。豚肉を食べてはいけないと、どこにも理由は書いてありません。しかしここには理由が書いてあって「不正を被ったがゆえに許された」と「戦闘は相手の不正があって初めて許される」というのが、この規定からはっきり読み取れるわけです。

キタールという「戦闘」という言葉ですが、専門用語的にはジハードは、もちろん戦闘になる。それについての最初の啓示がこれになります。後にクティバ、アライクム、「あなた方に戦闘が期待される」と出てきます。

命令形の中には戦争が課されるところで彼らは言った。「ムーサーよ、彼らがそこに留まる限り、われらはそこには決して入らない。それゆえ、おまえとおまえの主で行って二人で戦え、われらはここに座っている。」(5:24)。これはイスラエルの神が出エジプトで出ていった後、パレスチナの地に入る時、入るのを嫌がった。モーセに対してそう言ったということが命令形で出てきている、こういうのも挙げているわけです。

細かいクルアーンの解釈は読んでいただければいいと思いますが、ハワーズ・ベルゲスというオックスフォードの学者で、明らかにエジプトのコプト派のキリスト教徒で、高等教育はイギリスで受けた人で英語が堪能な方ですが、彼が*The Far Enemy and the Near Enemy*で、今年7月7日、ロンドンの「テロ事件」についても書いている新しい本です。「ジハードとイスラーム世界」にぴったりの本だったので紹介しようと思います。それなりにいい本で、比較的まともな本です。一言で内容をまとめると、カーイダに代表されるようなグループを、彼自身は「トランス・ナショナル・ジハーディスト」と呼んでいますが、「このグループはイスラームのジハーディストと呼ばれるグループの中で、もともと孤立していた運動であって、現在でもそうである。一般のムスリムがいて、イスラーミストがいて、さらにジハーディストがいて、その中にトランス・ナショナル・ジハーディストがいる」というのが彼の基本的に分け方です。「トランス・ナショナル・ジハーディストというのはもともとジハーディストの中でも少数派であって、他のジハーディストから反対を受けていた。さらに9·11によって、決定的に孤立して本来なくなりつつあるものであった。トランス・ナショナル・ジハーディストをもってジハーィストを代表させるのは間違っている。トランス・ナショナル・ジハーディストはジハーィストの過激派ではなく、ジハーティストとはっきり敵対しあう逆のベクトルを持つものである。さらに9·11以降、ジハーディストの中で強い批判を受けている。そのことが西洋には全然伝わっていない」というのが、この本の基本的な主張です。これはその通りです。西洋の方ではほとんど伝わってない。

題名は『近い敵と遠い敵』となっていますが、近い敵は何を指すか。身近なムスリムを名乗っているが、背教してイスラームの敵であるアラブの政権担当者たちです。遠い敵はイスラエルと、その後ろにいる人たち。「まず近い敵をやっつけよう。これが我々の義務である」というのがジハーディストと言われる人たちの基本的な主張です。この作者はエジプト人で、エジプトでジハーディスト、アラブでジハーディストと言う場合、これを指すわけです。つまり遠い敵であるところのイスラエルや西欧ではなく、それより前にまず自分の身内の中の敵を倒すべきだと。これをジハーディストと言う。敵をジハードをする。侵略者が攻めてきた時にジハードするのはあたりまえですから、ジハーディストと言う意味がない。名前に値しない。

ところが実際には70、80年代、サダトを暗殺したジハード団とイスラーム集団の二つのグループが一緒になってサダトを暗殺する。このイデオロギーは70年代から見えてきまして80年代以降、サダトを暗殺して、その後、武力闘争につながっていく。この議論は「まずイスラエルと戦う前に国内、自分の国をイスラーム法によって統治を行わない、イスラーム法にとって敵であるところの背教者にジハードをしないといけない。これが自分たちの義務である」という議論ですが、二つのイスラーム集団とジハード団では戦略が違いまして、ジハード団は大衆は一切信用しませんので「大衆闘争をやっても意味がないのでクーデターで目的を達成しよう」と。軍の中に入っていきクーデターによってやろうと。それに対してイスラーム集団は「イスラームを広めていこう」。イスラームは勧善懲悪という思想があって、よいことは実行する、悪いことは力づくでも阻止するという思想があるので、その一環としてイスラームを実際に実施して政府を力づくでも変えようと。大衆的な宣教の中でイスラームを広げていこうという学生運動ですが、「大衆的にイスラーム革命的なものをやろう」。これはイラン革命の影響も戦術的にはあるわけですが、そういう二つの戦略の違うグループが一緒になってサダトを殺すわけです。案の定、あとのことを考えていなかったのでうまくいかない。大衆もついてこない。その後、しかしジャマ・イスラミーアや大衆蜂起路線にジハード団が引きずられて、泥沼のテロの応酬が今も続いています。それと思想的に直接つながるわけではないですが、アルジェリア、イスラーム世界、アラブ全域で、ジハーディストという人たちの反政権闘争が繰り広げられています。

彼はジハーディストを二つに分けて「トランス・ナショナル・ジハーディスト」、これがビン・ラーディン、カーイダのグループ。「レリジャス・ナショナリスト」、これが近い敵と戦いたい人たち。この本の中ではそういう意味で使っています。近い敵との戦いは失敗して泥沼の内戦になります。70年代から始め、90年代の始めに転換があります。民衆の共感を得る、対イスラエル、アメリカ闘争にスローガンを戦略的に転換するという大きな転換があった。その背景には一つには共産圏が潰れたこと。ロシア軍がアフガンから撤退した。91年の湾岸戦争で米軍がサウジに常駐する。国内戦でレリジャス・ナショナリストが敗北する。こういう時代の中で、ザワーヒリ、もともとはエジプトのジハード団の指導者の一人が、ビン・ラーディンについてカーイダを立ち上げるということになります。近い敵との戦いをやったが、ちゃんと宣教ができない。イスラーム世界には言論の自由がありませんので、こういうものはすべて地下で出版するしかない。見つかると捕まる。正しい主張が伝えられない。イスラームの礼拝をして断食をして暮らしている国が、今、イスラームの国ではない。イスラームの国を支配している悪い奴らはムスリムではない。しかし「ムスリムではない支配者と戦わないといけない」と言われても民衆はよくわからない。共感を得ない。「なんで仲間同士、家族が敵対することをしないといけないのか」。それに対して「イスラエルが悪い」というのは皆が賛成する。湾岸戦争以降はアメリカ軍がムスリムの同胞を殺している。これはわかりやすい。近い敵からまずやっつけないといけないということだったが、うまくいかなくて、また実際に反政府闘争をやってもうまくいかない。なぜかと言うと単に政府をやっつけられないのは、政府だけが敵ではないから。後ろにアメリカがいて、それを支える国際秩序がある。武器も国際的な外交支援も、エジプト政府と戦うことは、

その後ろに控えているものと戦わないと勝つことができない。その二つが合わさって、国内の戦いにレリジャス・ナシナョナリストたちが破れていく。それで戦略を転換していく。それが対イスラエル、アメリカ闘争というビン・ラーディンの闘争になるわけです。ビン・ラーディンはもともとそういう人ではありません。ザワーヒリのような人たちは国内にイスラーム国家をつくるために戦略的に近い敵に向かうわけですが、ビン・ラーディンはそういう思想は全くない。ソ連がアフガンにやってくる、自分たちの仲間が殺されている。だから戦いに行こうということで、最後まで国内の同じムスリムの敵、背教者、為政者と戦うことを否定するんです。ごく最近、2003年、リアドで、爆破事件をやるんですが、これがカーイダのシンパによってやられた。それが転機になって、断末魔の嘆きで「ラクダの背中に重い藁を乗せ、最後の1本の藁で、もともと潰れかかっているものが潰れる」というふうに本では言っていますが。

もともとビン・ラーディンは古典的なジハード主義者であって、敵が攻めてきた時には戦わないといけないと。もともとは国内で近い敵と戦おうという考えを持っていたジハード主義者たちと合流してつくったのがカーイダだと。しかし最初は近い敵と戦っている人たちから裏切り者と見なされ、決して支持を得なかった。9·11以降も非難を浴びて孤立してきた。先細りで潰れそうだった。ところがイラクにアメリカが侵入することによって情勢が変わった。著者自身は今でも、これは先細りであって、いずれ潰れるという考えは変わってないのですが、イラクにアメリカが入ったことによって、それが大幅に遅れることになるだろうと。兵士をリクルートもできなかったのが、イラクがリクルート基地になって、いくらでもリクルートできるようになった。ザル・カーウィーもイラクに入った時点ではわずか30人しか部下がいなかった。泡沫的な人だったのが、今では5,000人～2万人の兵士を抱えるようになった。イラクがジハードを戦うリクルートの基地にもなり、先端基地にもなっている。トランス・ナショナル・ジハーディストはムスリム、イスラーム主義者、ジハーディストからも反対されていたのが、イラクに関しては一般のムスリムも、世俗的な政教分離的な政府の傀儡のような宗教者たち、アズハルト・タンタビィという人ですが、彼らも「イラクにおいて侵略軍と戦うことはすべてのムスリムのやるべきことである」とファタを出すようになってしまう。もともと支持を得られなかったトランス・ナショナル・ジハーディストたちが、ジハーディストだけでなく、イスラーム主義者も超えて、一般のムスリムにも説得力を持つような存在になりつつある。彼はそれも一時的な現象だと考えていますが、「イラク戦争によって先細りで潰れそうであったトランス・ナショナル・ジハーディストが力を盛り返してしまった。ジハーディストの方も力を盛り返した」。この人の姿勢は「アメリカが対テロ戦争などバカなことをやめて、対テロ戦争に乗るアラブの独裁政権も支援をやめて、アラブの市民社会層の政治参加を促進するような政策をとっていくべきだ」とまとめています。

彼自身はイスラーム学者ではないので、イスラームに関する分析は取るに足らないですが、現在のイスラーム社会、アラブのジハードに関しては一次資料を使って、彼ら自身が書いたものをふんだんに使い、ディテールで面白い読み物になっています。この人の書かれたものの中では現実を伝えるものだと思います。

以上、「トランス・ナショナル・ジハーディスト、カーイダたちはイスラームのジハーディストの中では孤立して、単に過激な人たちでなく、違うベクトルを持っているものであると押さえておかないと、今のイスラーム社会のジハード論は見えない」ということで説明しました。

もう一つは『ジハードとキタール』の3巻本です。1巻だけは目次を詳しく逐語訳しましたが「イスラームにおけるジハードと他の種類の戦闘」としてジハードの語源的、慣用的、専門用語的定義、古典的なイスラームの説明スタイルをしています。ムハンマド・ハイル・ハイカルが書いた本です。この人は同志社大学が学術協定を結んだアブヌール・イスラーム学院の先生です。しかしこの人は専任教員でない。奇跡のような話で、シリアはかなり自由化が進みましたが、政治に関する発言は一切許されない、特にイスラームに関しては。この本はレバノンのベイルートで出た本です。こういう人が公然と大学で教えていることは信じられないことです。組織的にメンバーかどうかは知りません。3巻本がインドネシア語に訳されていまして英語訳はありません。英語圏のイスラームに対する知識はいかに少ないか。イスラーム世界、マレー語、ペルシャ語に訳されているものに比べていかに少ないかということがわかります。

1章でジハードの言葉の説明をした後、12の戦闘の種類を出しています。「背教者との戦闘」「叛徒との戦闘」「盗賊団との戦闘」「生命財産名誉の私的不可侵性防衛のための戦争」、これは小規模な正当防衛です。7人の侍のようなもの。「為政者の逸脱に対する戦闘」、逸脱は背教者までいかない、スンナ派世界でシーア派の教えに従って支配を始めるようなことを指しています。「内戦」、叛徒との戦闘とは違いは、どちらに正当性があるのかわからない場合が内戦です。叛徒との戦闘は戦闘への合法性があって、それに対して弱い軍隊が戦っている。内戦は同じくらいの正当性の持つものが同じくらいの力で戦っている場合。次は正当性がある方が負ける場合。「権力簒奪する人間が力を持っている場合の戦い」「庇護民との戦闘」、庇護民はイスラーム社会で安全を保障されて生きている人たちで武装してはいけないことになっているから戦いは起きるわけではないですが、武装してしまって反乱を起こした場合にはどうするか。「敵の財産を奪取目的の戦士による戦闘」。イスラーム世界から外の異教徒と戦うわけですが、単に隣の国が豊かだから、石油があるから取りにいこうという場合。「イスラーム国家樹立のための戦闘」。地域レベルでイスラーム国家がない、だからイスラーム国家樹立のための戦闘、これがジハーディストの言うところのジハードです。この戦闘がジハードであるかどうかを議論しているわけです。「イスラーム諸国の統一のための戦闘」、イスラーム世界には一つのカリフの国があるべきですので、そのカリフの国をつくるために、現在あるたくさんの国を統一するために武力によって戦闘することが許されるかという議論。これらの12の種類の戦い。これは「他国にいる敵対的な異教徒と典型的なジハード」のケースとは別の12の種類の戦いを範疇化して、それぞれ専門用語としてのジハードにあてはまるかをどうか。当てはまらないにしても正当性があるか。「盗賊団との戦いは許されるが、ジハードではない」とか、まず「ジハードであるのかないのか」「ジハードであるにしろ、ないにしろ、そのことがイスラーム法的に正当化できるか」を論議しています。ジハードが合法化されるためにはヒジュラの前のマッカ期の戦闘の時代と、その後のマディーナの戦闘の時代に分けて「どういう時にジハードが正当化できるか」という議論をします。

ジハードの種類については、「イスラーム世界に敵が攻めてきた場合の防衛ジハード」「イスラーム世界から外に討ってでる場合の攻撃的なジハード」、最後にそもそもイスラーム世界とか、ムスリムという自明の前提とせずに「誰がムスリムか、何がイスラーム世界なのかを問い直して、イスラーム世界、ムスリム、イスラームを浄化していこうというジハード」の3種類があると考えています。基本的にはイスラーム法が論じるのは「イスラーム、ムスリム、イスラーム世界を固定的な自明の前提の上にイスラーム法系をつくっていく」わけですが、それとは別に「三つの類型がジハードにあるのではないか」という、イスラーム世界とジハードについての議論となっています。

CISMOR　部門研究1共同研究会
2005/10/22

「ジハードと『イスラーム世界』」

中田　考

Ⅰ.『遠い敵』 Fawaz A.Gerges, The Far Enemy - Why Jihad Went Global, 2005, Cambridge Univ. Press

※なぜジハードが国際化し、70年代に「近い敵（背教のアラブ支配者）」の打倒に専念していたジハード運動が90年代後半に「遠い敵（アメリカとその同盟国」のへのゴローバル・ジハードに転換したのかを説明。p.オ．

※9・11は単に「イスラームの家」の内紛の結果ではなく、jihadistの内紛の産物。p.24.

※Jihadistは90年代中盤に(1)transnational jihadist, (2)relligious nationalistに分裂。 p.25.

※「近い敵」との戦いの袋小路から、民衆の共感を得る対イスラエル・アメリカ闘争に巣尾ローガンと戦略転換。Pp.23-24.

※転換の原因：(1)ロシアのアフガン撤退とソ連崩壊,(2)91年湾岸戦争と米軍のサウジ常駐,(3)国内戦でのrelligious nationalis 敗北 p.30.

※転換の思想(Zawahiri):アメリカ主導の十字軍シオニスト同盟はアラブ政権打倒を決して許さないので、遠い敵との戦いを後回しには出来ない。p.32.

※アメリカ50年代以降の冷戦下で無神論の革命的民族主義社会主義との対抗のため政治的イスラームと同盟。サラフィー・ワッハービー・同胞団も深い対米不信にもかかわらずソ連ブロックよりは西欧を選ぶ。p.71.

※80-90年代一貫してビン・ラーディンは大不信仰（米）を小不信仰（アラブ支配者）より重視対内闘争反対。p.144

※カーイダのグローバル・ジハードはアフガンでの対ソ闘争と違い十分防衛的に見えずリクルートには失敗（米イラク侵略以前） p.231.

※ムスリムたちがビン・ラーデインの主張に共感しても、そのために血を流すわけではなく、戦略を実現し、アメリカとの戦力差を克服できるわけでもない。民衆の覚醒と動員は失敗していた。しかしアメリカの対テロ戦争は、逆効果で、カーイダの断末魔を延長。アメリカは、カーイダに止めを刺すべきムスリムの政治社会勢力との関係を津世埋めるべきなのに、逆に壊す間違った戦いをしている。pp.233-234.

※Jihadistは弾圧により1990年代後半に分裂衰退。カーイダは最後の足掻き。p.246.

※カーイダは2003年方針を変え、リヤドで対内ジハード決行。駱駝の背を折る最後の一本の藁。pp.249.

※カーイダは、従来のリクルート地アフガン、サウジ、イエメン、パキスタンを失いつつあったが、イラクに格好のリクルート地を得る。P.251.(ザルカーイーは最初30名の部下しかいなかったが、今は5,000-20,000の兵力 pp.259-260)

※イラク、かつてのアフガンに代わり「プロ」のjihadistのリクルート、訓練所化 pp.264-269.

※ラムズフェルト：「（イラクとアフガンでは今）アメリカが、捕らえ、殺し、抑止、思い止めさせられる以上の戦士を生み出している。」pp.269-270.

※カーイダ外からはアメリカの軍事攻撃、内側からはムスリムによる孤立化に晒されている。

※アメリカのコメンテーターとポリシーメーカーはカーイダを葬る最も有効な方法はムスリム世界の中で敗北させることと気づくべき。アラブの独裁政権への支持は、カーイダの罠にはまること。アメリカのイラク侵略は、カーイダのグローバル・ジハードに反対していた重要なムスリムの世俗主義政治・宗教集団を民衆から乖離させた。世俗詩人アドニス「アメリカはアラブに何を望む？　未来もなく歴史の背後に取り残したいのか？」と謳う。体制的アズハル総長タンタウィーまで、全ムスリムにイラクの侵略米軍との戦い促す。 Pp.271-272.

※アメリカはアラブの支配者に構造改革、社会諸層の政治統合への圧略をかけるべし。 p.276

Ⅱ.『イスラーム法におけるジハードと戦闘』

Muḥammad Khair Haikal, al=jihād wa al-Qitāl fīal=Sharī‘ah al=Islāmīyah, vol.1-3, 1996, Beirut, 2nd ed..

(インドネシア語訳:Jihad & Perang Menurut Syariat Islam, 2004, Pustaka Thariqul Izzah)

第1巻

第1部：イスラームにおけるジハードと他の種類の戦闘

1章：ジハードの語源的、聖法的、慣用的、専門用語的定義

2章：イスラームにおける戦闘の種類。そのうち何がジハードの範疇か？

1節：背教者との戦闘

2節：反徒との戦闘

3節：盗賊団との戦闘

4節：生命、財産、名誉の私的不可侵性の防衛のための戦闘

5節：イスラーム世界の公共的不可侵性の防衛のための戦闘

6節：為政者の逸脱に対する戦闘

7節：内戦
8節：権力簒奪者との戦闘
9節：庇護民（国内の異教徒）との戦闘
10節：敵の財産奪取目的の戦士による戦闘
11節：イスラーム国家樹立のための戦闘
12節：イスラーム諸国の統一のための戦闘
第2部：ジハードの合法化
1章：ジハードの前段階：ヒジュラ前のマッカ期のイスラームの宣教
1節：秘匿局面のイスラームの宣教
2節：公表局面のイスラームの宣教
3節：部族長への提示と援助者との戦争に対する忠誠誓約局面のイスラームの宣教
2章：ヒジュラ後のマディーナ期のイスラームの宣教
1節：戦闘許可
2節：預言者の戦記にみる戦争の伝承と和議による停戦の概観と演繹される主要規定
3節：使徒の諸国の為政者へのイスラームの宣教と、そのジハードとの関係
4節：正統カリフ時代におけるあらゆる方面へのジハードの宣戦の諸原因
第3部：イスラームにおける宣戦の諸事由
1章：攻撃への反撃
1節：イスラームにおける戦闘の一つの理由としての侵害
2節：何への攻撃かによるムスリムへの侵害の諸形態
3節：「イスラームの家」か「不信仰の家」への帰属に応じてのムスリムへの侵害
4節：庇護民とそれに準ずる者と非庇護民のムスリムの同盟者への侵害はムスリムへの侵害
5節：庇護民でない不信仰者とそれに準ずる者、同盟者でない者への不正、侵害がイスラームにおける戦闘の理由の一つとなるか？
2章：イスラームの宣教に対する阻止
1節：イスラームにおけるジハードの理由となる「イスラームの宣教の阻止」の意味
2節：他国の非ムスリムに何を呼びかけるのか。
3節：イスラーム、あるいはイスラーム秩序への呼びかけへの諸国、民族の対応、とその法的効果、ジハードの合法化
第2巻
第4部：ジハードの諸法規
第5部：戦時政治におけるイスラーム法規

第3巻
第6部：イスラームにおける戦闘中止の理由、宣教普及、和平定着、生命保護におけるその効果
第7部：現代におけるジハード
第1部：理論的研究におけるジハード
1節：ムスリムの著述家にとってのジハードと反証
2節：非ムスリムの著述家、百科事典におけるジハードと反証
第2部：現代の戦争の現実におけるジハード
1節：他国に対してムスリムが非ムスリムとの参戦を定めた軍事同盟。
2節：軍事基地、空港の賃貸、武器、戦略物資の売買、その他の援助。
3節；イスラーム諸国の間の戦争
4節：イスラーム世界内の軍事組織、その活動についてのイスラーム法的判断

参考文献

中田考.『ビンラディンの論理』、小学館文庫、2002/1
中田考「「イスラーム世界」とジハード-ジハードの理念とその類型-」
『イスラーム国家の理念と現実』　栄光教育文化研究所，　pp.200-229，　1995/05